

29【P2】Ⅱ-276

地域小中高校生の薬に関する知識・行動の実態調査と地域貢献のあり方について
○塩村 和子¹, 稲野 彰洋¹, 能村 明文², 小坂 美樹子³, 木谷 典子³, 山田 順子^{1,4},
大柳 賀津夫^{1,4}, 山田 清文⁴, 鈴木 永雄⁴, 辻 彰⁴(¹アカンサス薬局,²能村薬局,³マル
サンスター薬局,⁴金沢大薬)

【目的】近年、薬をめぐる地域社会環境は大きく変わり、医薬分業の進展に加え、規制緩和の流れやドラッグストアの進出を受けて、薬へのアクセスは非常に容易になった。それと同時に、マスコミやインターネットには健康情報が氾濫し、薬局薬剤師でもその把握は困難である。地域住民の薬事衛生をつかさどる薬局は、地域の実態に合わせて薬に関する健康・環境・教育に貢献する必要がある。そこで、正しい医薬品の使い方を地域に啓発するために、地域小中高校生に対して薬に関する知識や行動実態を調査することとした。

【方法】調査対象を、大人への好奇心が芽生える一方で判断力形成がされると言われている小学校3年生を最年少として、小学校5年生、中学校2年生、高校2年生に層別化し、ほぼ同じ内容のアンケート調査を実施した。アンケート規模は各層で100名～150名程度とした。アンケート内容は、20分以内で回答できるように選択肢式とし、事前に学校側のチェックを受け、設問の表現や難易度が児童・生徒への質問として不適切でないことを確認した。アンケートは保健体育あるいはホームルームの時間に行った。

【結果および考察】薬に関する理解度や服用を自己判断で行う割合は年齢を重ねるに連れ増える一方で、一貫して薬剤師認知度は低く、薬に関する判断を親に仰ぐ割合は4人中3人と高かった。これより親を対象にした「薬の適正使用」の啓発活動が有効であることが示されたが、同時に薬剤師職能の地域への浸透が必要である。実態調査に基づいた、薬剤師ニーズの開拓が重要であると考えられる。